

たに整備されたコンサートホールの名前でもある。

グダンスクは、人口約46万人、モトワヴァ河口のバルト海南部グダンスク湾に面するポーランド最大の港湾都市で、ポモージェ（ポメラニア）県の県都である。中世から都市が作られ貿易港として栄えた。14～15世紀のドイツ騎士団の支配、18世紀以降の国土分割・消滅に伴うロシアやプロイセンによる領有、第1次大戦後の「自由都市ダンツィヒ」、第2次大戦のドイツ占領を経て、1980年代の「連帯」による民主化運動の拠点となるなど、ポーランドの複雑な歴史を反映する舞台であり続けた都市である。プロイセンやドイツなどドイツ系の支配下では「ダンツィヒ」の名で知られた。

第2次大戦後、造船業と貿易で大いに発展したが、1970年代にはオイルショックなど世界的な不況の影響もあって旧来型の「重厚長大産業」は衰退した。その結果、多くの産業施設が遊休化して放置され、今日の産業遺産として残ることとなった。なお、同時代はソ連支配下の東側陣営であったが、国際競争下の産業構造転換に対応できなかったミスマッチは、新たな社会資本投資がされずに歴史的な遺構が温存されることの背景となっただけでなく、同時に当時の民主化運動、労働運動の背景となった（思想面だけでなく経済面で）と考えられる。

以下、同施設のウェブサイト (<http://www.filharmonia.gda.pl/>) などを参考に概要を紹介する。

(1) 沿革

同楽団は、終戦直後の1945年6月、ローマン・ククレビツ (Roman Kuklewicz) によってグダンスク市立交響楽団として設立された。初のコンサートは、1945年9月29日にソポトのカトリック大聖堂ホールで行われた。35人のオーケストラはズビグニェ・フトゥルスキ (Zbigniew Turcki) の指揮のもと、ショパンとモニューシコ (Moniuszko) のプログラムを演じた。その後多くの指揮者を迎えて1945年だけで、9プログラム16回の演奏会を開いている。

1946年初頭からは政府の補助金が支給され、その後の活動の基盤が築かれた。

1949年には団員は81人となり、ポーランドで最高のオーケストラとの評価を得、同年4月には国有化されて「国立バルト交響楽団」の名称となった。

1953年、ジークムント・ラトシェフスキ (Zygmunt Latoszewskiego) の下でオペラ座を統合し、「国立バルト・オペラ・フィルハーモニー (Państwowa Opera i Filharmonia Bałtycka) : 通称POiFB」となって交響楽とオペラの両方を担い、芸術監督カジミェシュ・ヴィルコムルスキ (Kazimierz Wilkomirski) に率いられることとなった。その後監督は1970年までタデウシュ・リボフスキ (Tadeusz Rybowski) がつとめた。

交響楽とオペラの両方を兼務した背景には、オペラと、組織や財政的基盤を急いで整備しなければならないという事情もあった。その効果は劇的であったが短命でもあった。

およそ20年後には重要な決定が検討されることとなる。すなわち、活動が成熟するにつれて、1970年代初頭にはオーケストラと国立オペラを分離する新たな展開が求められた。

オペラやバレエと連携したPOiFBの活動を残しつつ、1975年1月には「グダンスク交響楽団」として初コンサートを開き、意欲的な活動を展開。広く海外からも評価されるようになる。

その後、多彩な芸術監督を迎え、国内外で活発な活動を続ける。1976年ヴェネツィアの「Vacanze Musicali」を皮切りにドイツ、フランス、スイス、イタリア、ウィーン、ザルツブルク、パリ、ベルリン、ブレーメン、フランクフルト、レニングラードなどに遠征。1987年にはヴォイチェフ・ミフニェフスキ (Wojciech Michniewski) 指揮のバルト交響楽団はベルリンで11月音楽ビエンナーレに登場、モスクワ、ライプツィヒ、ヘルシンキといった並居る有名楽団の中で、ペンデレツキの交響曲でオーケストラ最優秀批評家賞を獲得した。

1989年（ベルリンの壁崩壊の年）にはフランクフルトの「ツェツィリアン連盟 (Cecilien Verein) 合唱団」との合同ツアーで、ミュンヘン・フィルハーモニー、フランクフルトのアルテ・オーパー、アムステルダム・コンセルトヘボウなどで演奏し、1991年にも欧州各地に遠征、イタリアの教皇の夏の離宮カステル・ガンドルフォで教皇ヨハネ・パウロ二世を迎えての演奏会も行った。

その後、40年の時を経て1993年に芸術監督ローマン・ペルツキ (Roman Perucki) のもとでオーケストラとオペラは完全分離し、「ポーランド・バルト・フレデリック・ショパン記念フィルハーモニー」へと移行することとなり、新しい本拠地が必要となった。

(2) 概要

新しいフィルハーモニーの本拠地として白羽の矢が立てられたのはグダンスク旧港の一部、オウエヴィアンカ (Ołowianka) 島にあった築100年以上の歴史的な公営発電所の建物である。

これも産業遺産を活用した芸術文化型の再生の事例であるが、その内容はほぼコンサートホール単独となる。

芸術監督ローマン・ペルツキの次のようなエピソードが伝わっている。

「ストックホルムから150kmの距離にあるノルヒェーピング (Norrköping) の友人の招待でおおよそ1ヶ月の旅から家に帰る途中のことでした。その島では、古い発電所跡に建てられた施設に交響楽団が入っていました。建物前面の水面には滝が流れ、博物館、レストラン、居酒屋、パブなどが同居しています。これこそ真の文化拠点と呼べるものです。それから私は、オウエヴィアンカ島と解体撤去されることになる古い発電所のことを考えました。グダンスクで同じようなものが作れないだろうか？到着後すぐ、フェリー（対岸と島をつないでいる唯一の交通手段）から降りるやいなやここに駆けつけました。私は旧発電所を見て、自分自身に言いました - ここに新しいコンサートホールを作るのだ！」

ペルツキの努力もあって、時代遅れの遺物として放置され、荒廃していた旧発電所跡とその周辺は、新たな機能に合わせるため、国を挙げての大掛かりな再整備が行われた。

旧発電所は、1897-1898年にかけてベルリンの「ジューメンス&ハルスケ (Siemens & Halske)」によって建てられたものであるが、改装や拡張は1913年まで続いた。